

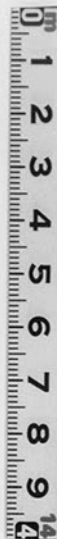
路傍詩

1 2



甲斐

版會の詩



自由宣言への自由解放

中 野 勇 雄

宣言、言ふ——我等はあらゆる自由を宣言す！

否、扱て、否！

汝の宣言を撤回しろ

宣言に限界されるその自由は

烈風にあはらる——草木の喘ぎだ

お、自由！自由はかの雲の如く漂々——

あ、我等！

突兀たる意思欲充の如何に濟測たるか

浮雲の自由の如何に躍動的自由であるか

常に意志の潜勢的なる自由

限界宣言を虚殺した自由

それこそ汝の宣言の外にでもある！

お、自由、雲の如く、ニヒリステックな自由

我等は我等を喝采しやう！

下 痢

猛烈な下痢だ

半身がドット抜け落ちた

敬だ

半身は開いたまんまの口で空を呑む——

喝采だ！

一つの偶意

松 村 清

灯のない夜道は小馬のやうにはずむんだ

背丈けの伸びそだつた

やはらかい先軀が

こはい、こはい星座をおしへた——

月夜と豚

風、

月、

影、

豚營の彼は健康な忘却のえびきをたててゐる——

花

猪 狩 満 直

花が呼びかけてゐる

花よ呼びかけてゐる

練り合ふ金屬

磁鐵・熱・光

空間が全く破壊されてゐる

過程を過程する

——〇君へ贈る——

中 野 大 次 郎

歪んだ顔

歪んだ手足

お前もやはり創造主に生み落されたのか

「何と、創造主よ」

汝は意地悪い奴なのだ！」

お前達のやうな犬がいつまでも横行することを拒絶する、

おれたちは

お前達の歪んだ顔をこの地べたに叩きつけ

お前達の歪んだ手足をおれの前に叩きつけて

「何と創造主よ」

あなたは意地悪いのか！」

明日の人形をつくる、明日の魂をいれる

一人がみんなのすがたとなりみんなが一人の

すがたとなつて、いま

新世界への歩調を合せろ！

おたがひを熟視しろ！顔！手足！

白毛の生えた黒い馬

三 野 混 沌

白毛のはえた黒い馬
三人がぐるりぐるりあるいた
よふけ
白毛の生えた黒い馬
牽かれていつた
二人よ
一人はボロリと涙を流した
十二月の月に遠く

こゝども詩篇

高 橋 久 由

ほはつべたに吸ひついて
はなれたかあないなあ
おんみよ
わんぐりわんぐりわんぐり
てんてをつぎつてつぎつて

月夜の煙突

石 川 武 夫

風がないから
あんなにまつすぐに煙りが上るのだ
庭の隅にはまだ雪が残つてはゐるが
何んというはつきりした塙の影だろう！
こうして
便所の前よ立つてゐるよ
風呂場の硝子窓から話し聲が洩れてくる

黒 潮

高 瀬 勝 男

多角形な生物の反面よ
がたくる社會
社會はまるで蟲が巢だ
くひあらず
くひあらず

オレタチ

小 林 直 人

さあ兄弟！
其處にぞんよりした眼で
畸形な街氣のためにひざまづきかねてゐる
無細工な圓筒のあから顔を見てやつてくれ
銅片だの 榮葉服だの 小女の片腕だの
そろそろ尻の方から出しかけて
泣つ面でぶざまな秋波を送つて呉れたつて
オレタチは共產主義的戯曲ほごにも喜びはしない
火燭の流れの荒波に乗つて育つた
オレタチの教養は 力は もう君達を
紙片の詰つたボロ倉庫ごしか考へてはゐない
オレタチの旗號はもはや粗野な下等更紗ではない
ボロ服に包まれた
この胸よ觸つて見てくれ！

打ちくだける 力を
なせか
女よ

土の層にうすくまる
男よ
人間よ
飛びさり 飛び来る
吹雪の中に 燃えつくせ
おそろしきウナリの中よ踊れ
あゝあ
嵐がくればいい
みちんに古草をゆすつて
嵐がくればいい
こうして座つてゐるよ
手 足は必要ない

座つてゐる人間に手足は贅澤だ
畜生の爲に食物をはこぶなよ

無題

— COAL-MINER —

松本純一

押尾孝

真黒い火を喰つて虫けらよ

闇へ闇へ浮びあがる赤錆びた

マツチ箱が

おお襪せてゆく血脈だ

鉄臭く重い表情が顔をかけめぐつて土のからだを呼ぶ

肉体の放散!

——ただ解体した無口がいちめんに凝結してゐる、

2

腐敗した地葱

脊骨のない葱の一束だ

押しひらくカンテラの限らない遁走

鉛の空氣にはんらうされて

何處までも續く骸骨の灰燼

君の蒼ざめた顔が君の心を悲しくするのであつたら

私のたつた一つの心臓を破つてもいい

ごさえ言つたのに

何もない男は意氣地のない手をついた

よれかかる鬱雲に吸いよせられて

むるむるご高くゆすぶれる晝の松篔をみつめ乍ら

私の網膜は齒かゆいひびきを立ててスケかかる

小便に起きて

あんまり月の明るいのおごろいた

真夜中

生大根を噛り乍らむしやうにうれしくなつて了つた

劇詩 復活 三幕

松本純一

●開いてる窓側へ夢のやうに近寄つた私の背中へ——

●お前は——窓を知りたいね——

●壁の聲は絹糸みたいに——細く途切れて了ふ

●室のランプの光りは窓を押し破つた外の明るさにひしよげて暗い

●窓一つばいゝ咲いた風景は静かな街路である

●色彩のはげしい服装を纏つた路傍の人が日脚の様に通る

●櫟に似た樹木がふんだんに枝頭を低い空に研ぎあつてゐる

●鴉の髪をもつた子(らしい)が路ばたの緑石に足を休めて居る

●子供は白い足を裸にしてその蓋が土ごゆつくり口づけする

●私の顔がいちめんにグイグイ「若さ」の血脈で盛上つてくる

●子供はたへず誰かご話し合つてゐる様に獨りうなづいてゐる

●いきなり子供は自分の掌まべたべた唇を貼りつける

●可笑しな子供だと思ふしりから何か新しい空氣を吸はなければならぬ

●兎に角通る人通る人皆んなが空間の誰かと話しこんでゐる

●真黒い三角の家の背後へ鈍重な夕陽が迫つてくる

●私は鏡扉を無意識に閉めて室の明るさを戻さ——

●お前はここの室の鏡を忘れてゐるね——

●こみ上る樂譜のやうな音聲がじゆうたんのを削ふ

●訝しげに小首がよれた時ピカッピカッベツトの方でつぶやいたものがある

●あつた、あの鏡だね——

●私はソツと私を別々発見するために鏡に近づく

●寢床のカーテンの側面は鏡がある

●鏡は鶏卵型で、白い藻の花が可愛く咲いてゐる

●私は悪魔がなんか呼びかけるのを待つたが音沙汰ない

●突然私は鏡と直面する——頭の機械はネチを切らして噴めてゐる

●見へない、私は、私は何處に居るのだ——

●私は夢中で鏡の面をハツと拭きこする細目に、そうして大きく鏡を覗いたが

●室は、じゆうたんなは寫つるが——見えない、見えない——

●こんなに怖へたことはない、手を目もちらつかす

●こんなよはつきり見わるのだだに鏡の中の私は消れてゐる

●そんな筈はない——

●盗汗をふきふき軀を鏡にすりつける私、

●お前は、鏡の中に俺が棲んでゐると腹立つてゐるね——

●私は、私の鏡の中に居ないんだ——

●お前は臭氣のない肉体を動かしてゐたつけね——

●見えない、苦しい、ああ苦しい、これは鏡ぢやない——

●お前は、お前の影もないのだ——

●なにッ、貴様は一体誰だッ——

●熱風がうづまいて鏡の真ん中がとけたストロトロトロと

●私は跳ねつけられたやうに氣がつく——

●光りを横切る自分の影がまつたく消滅してゐる

●私は烈風の如く窓端に飛びこんで鏡扉をサツと押し開らく

●街路がない——濁り切つた大河が悠然と漂つてゐる

●うまくやつたな、私の影は私を裏切つたのだ——

●さらびやかな寢床は光と影の幻惑!

● 私は室中を狂はしげに見まわす——影が私の影が限りなくひろがつてゐるのかしらと思つたからだ——が失望が手を打つのみである

——お前は、俺が誰だか解けたかね——

「畜生ッ！ 私を返して呉れ貴様が返してくれたら如何にも『悪魔よ』と流暢に呼んでやる——」

● 私は不圖 血走つた瞳で鏡一面を植えつける

● 若い海のやうなインク瓶を私はふところから取りだす

● とけきらない鏡の横ッ面と瓶の破片が花びらのやうに舞ふ

● ——同時に私は軀の中心を支へることができず無造作に倒れて了う

● 開いた掌は青く静かに伸びていく

● 悪魔は北叟みながら素早く鏡からベツトの方向に脱いだしたのである

——未完——

——幕——

■ 註

また續けなければならない
紙面のことで割愛するのはやむ得ない事だと思つてゐる。

編輯後記

松本純一
表紙版畫 高瀬勝男

● 彼岸雪の下に 下にしつかりと芽ばいたのです
見えない大きな力を打ち碎いてその飛び散つた
ひびき！ 光り！

● 張り切つて眞すくな生活の標りに健康であるべき自分たちをみつければならないのです
詩という發光体で——

● 油に吸はれた ますその腰をおろせ
鐵輪に枷つた自由はその腕を投擲せろ
ひさつのころを こゝあつめて

● 無心の嬰兒から奪取した乳房を復活させろ

——蒼ざめて語らぬとも
この握り締めた掌の中の熱汗を知るまい
同じ青と青に革命を叫く君等よ
カッカンと青つるみ
空氣裂ける音近く
この蒼空 この蒼空
變轉を合掌す

● 平坦なる石道に今は早や軀疲れたり
路傍詩は膨大なる氾濫にその性格を運行すること
に依つて根強い生噴をまげばならないのです

● 路傍詩

● 第十二輯

編輯担当者・松本純一

昭和二年三月卅日

發行

發行所 福島縣平町田町六二（松本方）詩の會・路傍詩社
印刷所 福島縣平町一丁目三 高瀬活版所

◆ 寄贈誌多謝 ◆